



インカレ団体戦を制した卓球部のメンバー

気持ちの強さ、 団結力が大舞台で結実

33年ぶり 卓球部がインカレ男子団体を制覇

卓球部が、2025年7月の第94回全日本大学総合卓球選手権大会（インカレ、団体の部＝男子）で33年ぶり7回目の優勝を飾った。決勝は3－2で早稲田大に競り勝った。長い雌伏のときを経て、悲願を達成したメンバーに喜びや勝因などを尋ねた。

（記事中の写真はすべて卓球部提供）

道廣晴貴選手が殊勲賞獲得

「うれしいより、びっくりだった」「本当に優勝したのかと、実感がわかなかった」

33年ぶりの栄冠にも、谷本凌・前主将（インカレ時の主将＝文4）、青山貴洋・現主将（文3）は同じ思いを抱いていた。

青山主将は「1回戦から準々決勝まで1試合も落とさずにストレートで勝ち、良い流れで準決勝、決勝に臨めた」と振り返った。強敵と思われた大学がトーナメント序盤に姿を消し、優勝に向けてより気持ちを新たにしたいという。

結果的に準決勝、決勝は想定していなかった相手との対戦となったが、いずれもチームの勝敗に直結する最後の5番手として道廣晴貴選手（文3）が出場した。「力を出し切れれば、結果はついてくる」と重圧をはねのけ、中大に勝利をもたらした。道廣選手は大会の殊勲賞を獲得した。

「ダブルス」勝利で躍進

谷本前主将は「（準決勝も決勝も）ダブルスを勝てたことが大きかった」とし、とくに決勝のダブルスで、前出陸杜選手（商3）、小野泰和選手（文1）のペアが、ゲームカウント0-2、ポイント3-6という土俵際に追い込まれた局面から、底力を見せて逆転勝ちしたことを一番の勝因に挙げた。

惜しくも2位に終わった春季関東学生リーグ戦（男子1部）の悔しさから、「インカレは絶対に優勝したいという思いが強かった」と、谷本前主将は打ち明ける。「その思いがあって、ベンチの全員が最初から最後まで良い雰囲気での応援できた。戦っている選手も思い切ってプレーできたと思う」と、チー



大会で殊勲賞を獲得した道廣晴貴選手



そろってVサイン

ベンチ入りメンバー

谷本凌選手	（文4）＝主将
青山貴洋選手	（文3）
藤本雅也選手	（経済3）
前出陸杜選手	（商3）
道廣晴貴選手	（文3）
小野泰和選手	（文1）
石山浩貴選手	（文1）
菅沼翔太選手	（文1）

ムメイトに感謝した。

波が少なく安定したプレーが特長という青山主将は、「インカレ優勝は秋の関東リーグ戦に向けて、チーム全員の自信になった」と胸を張った。準決勝、決勝ともゲームカウント3-0で相手を退けた道廣選手も、「全員が一致団結できたからこそこの優勝だった」と、“チーム一丸”を強調する。「(3-0という)結果だけだと楽に勝ったように見えるが、いつ挽回されるか分からず、一本も気を抜けなかった」と振り返り、勝った瞬間はほっとした気持ちになり、自然と仲間に向かってガッツポーズを繰り返したという。

道廣選手は「高校時代は1、2番手での出場が多かったけれど、僕は緊張しないタイプ。5番手は確かにプレッシャーがきついので、メンタル面が成長できた」とも話した。

秋季関東リーグ戦とともに、来年の春秋リーグ戦とインカレも「全部勝ちたい」と、青山主将と道廣選手は口をそろえた。卓球部の躍進に今後も注目だ。



決勝のダブルスで活躍した小野泰和選手

取材後記

「うまくなりたい、強くなりたい」 卓球への情熱が支え

学生記者 荒田智海(文2)

優勝を決めた最後のショットが決まった瞬間、実力者ぞろいといわれながらも、長らく優勝から遠ざかっていた卓球部のメンバーは「ヤーッ!」と雄たけびを上げて立ち上がり、会場は大歓声に包まれたという。

「優勝を目指していた春季関東学生リーグ戦は2位。その悔しさと、インカレ団体は3年連続ベスト4ということもあり、今回はそれ以上の成績を目指して挑みました。勝ち上がるにつれて、だんだんと優勝できるかもしれないと思うようになりました」(道廣晴貴選手＝文3)

大会前から優勝を意識していたわけではない。道廣選手だけでなく、今回取材に応じてくれた谷本凌・前主将(文4)、青山貴洋・現主将(文3)も同じイメージを描いて、大会に臨んでいた。

インカレ団体は対戦ごとにシングルス2戦、ダブルス1戦、シングルス2戦の順に5試合で争う。全試合で1番手を任された青山主将は、準決勝・決勝と敗れたものの、「トップバッターが試合の流れを左右する。仮に勝てなくても、良い感触をもって2番手の選手につなぐ」ことを心がけたという。一人ひとりが自身の役割を理解し、試合でそれを表現すること。メンバー全員がこれを徹底した先に優勝があったのだ。

3年生になり、以前に比べて思い切りのよいショットを打てなくなっていることを実感していた青山主将は、スクワットなどの筋力トレーニングの量を増やし、体幹を鍛えることに力をそそいだ。一方で、「試合で弱気になることがある。メンタル強化が課題」と、自身の弱点とも素直に向き合った。強くなるために自分を追い込む姿に胸を打たれた。

中大は1回戦と2回戦、準々決勝をストレートで勝ち上がり、5番手の最後のシングルスを担当した道廣選手は、準決勝がインカレ初戦、決勝が2戦目となった。道廣選手の勝敗は必然的にチームの成績に直結する。決勝は、春のオープン戦で惜敗した相手との顔合わせだったが、プレッシャーがかかるはずの試合にも「全力を出し切る」と臆することなく戦い抜いた。

大一番も自分のプレー貫く

「結果(ゲームカウント3-0)だけを見ると、余裕をもって勝ったように見えますが、一本ずつ力を込めて打ちました。いつ挽回されても不思議はないので、消極的にならないように、自分のスタイルを貫きました」と振り返った。

気持ちの強さも見逃せない。「僕は緊張しないタイプ。5番手として戦う覚悟はできていたので大丈夫でした。インカレ決勝の5番手を戦うことができる人なんて、なかなかいませんから」。

「勝負の分かれ目」を尋ねると、「勝ちたいという気持ちの強さで決まる」と答えた。競った場面で、いかに思い切ったプレーができるか。守りに入らず、自分のプレーをやりきること。タイトルがかかった大一番でも、道廣選手が硬くなることはなかった。仲間の声援を背に受け、自分の戦い方を貫いたことが勝因の一つといえるだろう。

「精いっぱいやって、できなかったらしょうがない。この精神で卓球と向き合っています」。道廣選手を支えているのは、「卓球がうまくなりたい、強くなりたい」という情熱だ。来年また、歓喜の声を聞きたい。



決勝で熱戦を繰り広げた青山貴洋選手

第94回全日本大学総合卓球選手権大会(団体の部＝男子) (2025年7月3～6日、三重・四日市市総合体育館)

▽ 1 回 戦	中央大	3 - 0	札幌国際大
▽ 2 回 戦	中央大	3 - 0	立命館大
▽ 準々決勝	中央大	3 - 0	日本体育大
▽ 準 決 勝	中央大	3 - 2	朝日大
	青山貴洋	1 - 3	岡野俊介○
	○小野泰和	3 - 1	川村康人
	○前出陸杜・小野泰和	3 - 0	岡野俊介・梅村友樹
	前出陸杜	1 - 3	梅村友樹○
▽ 決 勝	○道廣晴貴	3 - 0	王翊翔
	中央大	3 - 2	早稲田大
	青山貴洋	1 - 3	濱田一輝○
	○小野泰和	3 - 0	磯村拓夢
	○前出陸杜・小野泰和	3 - 2	濱田一輝・徳田幹太
	前出陸杜	0 - 3	徳田幹太○
	○道廣晴貴	3 - 0	濱田尚人

(中央大は33年ぶり7回目の優勝、記録は日本学生卓球連盟サイトより抜粋)

取材後記

「好きなことに真剣に」 まぶしい姿

学生記者 九十歩胡春(文2)

ふだんの練習場所となっている多摩キャンパス第一体育館で、インカレ団体戦に出場した卓球部のメンバーにインタビューした。その話の内容から、多くの発見があった。まず、団体戦の目標を初めから意気込んで「絶対優勝」としたのではなく、「最低でもベスト4」と決めていたことに驚かされた。

今回の団体戦は優勝候補と目された強豪校が序盤で敗退するという波乱の展開となった。上位に勝ち上がるにつれて自信を深めた中大の選手たちは、徐々に優勝を意識するようになっていく。私はそれがとても現実的で謙虚な姿勢だと感じた。

青山貴洋主将(文3)は、波乱が起き、想定と異なる相手と向き合っても、選手各自がビデオなどで対策を練り、柔軟に対応できたことが勝因だと胸を張った。インカレ当時の主将、谷本凌選手(文4)は「正直、優勝できとは思っていなかった。(直後は)実感がわかなかった」と振り返り、「(決勝戦3戦目の)ダブルスを取れたことが大きな勝因。優勝したいという思いがベンチからの応援にも出ていた」とうなずいた。

取材を通して、アスリートとしての体づくりや技術の向上も大切だが、精神的な強さがプレーを支えているという印象を受けた。平日の授業後や週末の練習、スクワットなどの筋力トレーニングに加えて、青山選手らはメンタルの大切さを熱っぽく語っていた。

重責にも「緊張しないタイプ」

卓球選手に求められる資質を尋ねたところ、青山主将は相手の嫌がるプレーを続ける「ずる賢さ」と「自我の強さ」を挙げた。試合で弱気になる場面をなくそうと、練習試合でも勝ちにこだわっているという。

5戦で勝負を決するインカレ団体戦で、最後の5戦目を任されたのが道廣晴貴選手(文3)。チームの勝敗を決する重責の5番手での出場にも「緊張しないタイプ」と話した通り、焦る気持ちはなく、試合に臨んだ。

「実力があっても守りに入ってしまい、自分のプレーができないことがある。最後はどれだけ勝ちたいかという気持ちが大事」という言葉から、メンタルがプレーにいかに影響を与えるかとともに、道廣選手の自信もうかがえた。

道廣選手は岡山出身で、中学・高校時代は福岡の名門卓球クラブに所属した。小学6年生のときには、親元を離れて一人で卓球に打ち込む環境が自立を促し、自分の糧になると前向きに捉えていたという。「卓球が好きだから続けられている」と語る表情から、「卓球愛」とともに、継続してきた努力と精神的な強さを感じ取れた。

道廣選手をはじめ、好きなことを当たり前のようになんげに続けられている卓球部の選手の姿は、大学生になって競争や挑戦を避けがちになっている私に、とてもまぶしく映った。

[illegible]

MVPに殊勲打の片倉裕文選手(法3)

軟式野球部 全日本学生選手権決勝で劇的勝利

(記事中の写真はすべて軟式野球部提供)

「チームの皆が必死でつないでくれたチャンス。そこで打てて感無量でした」。2点を返し、5-7の2点差と迫った九回一死満塁の場面、左打席の4番片倉選手が外角直球を振り抜くと、打球はレフトへ。「捕られるかも」と思ったのも一瞬、ボールは左翼手の頭を越えた。走者一掃の逆転サヨナラ打。ホームベースに歓喜の輪ができた。

九回の攻撃前、ベンチ前で円陣を組み、海老沼主将が語気を強めた。「ここまで何のために頑張ってきたのか。全日



逆転サヨナラだ！ ホームベースに駆け寄る中大ナイン＝2025年8月26日、スリーポンドスタジアム八王子

本で優勝するためだよな」。奮い立ったナインは誰ひとりあきらめることなく、後続にチャンスをつないでいった。

春の東都リーグでは打率1割台と、「チームへの貢献が十分ではなかった」と振り返った片倉選手。全日本の決勝では三回の先制機でこそ凡退したもの、土壇場でチームを救う起死回生の一打を放った。最後の打球に「皆の思いが乗り移った」と声を弾ませた。

サヨナラの場面で海老沼主将は二走として本塁に生還した。ナインが喜びにわく中で「安心感、ほっとしたという心境でした」と記憶をたどった。喜びよりも、安心感がまず胸にわいた。勝たなくては、という責任感から解放された思いだったという。

前年の先輩たちは「黄金世代」と称され、圧倒的な強さで全日本を制した。「今年も絶対に勝ちたい」。安堵の思いは3連覇へのプレッシャーが大きかったからにほかならない。

「全員野球」でプレッシャーに勝つ

大会で、海老沼主将は準決勝の福岡工業大戦の自身のプレーが記憶に残っている。九回二死二、三塁で、遊撃手の自分のところに飛んできたライナー性の打球を止めきれず、同点を許してしまう。記録は安打だったが、この失点を何とか取り返したいという気持ちが、タイブレークとなった

第48回全日本学生軟式野球選手権大会

(2025年8月23～26日、スリーポンドスタジアム八王子ほか)

〈決勝〉

東洋大	0	0	0	3	3	0	0	0	1	7
中央大	0	0	0	1	0	1	1	0	5X	8

(東) 黒須、濱岡、廣瀬一藤原

(中) 井出、田邊一寺沼

〈準決勝〉

中央大	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	6
福岡工業大	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	4

(大会規定により十回からタイブレーク)

(中) 中田、井出一寺沼

(福) 宮山、奥田一齊藤

〈2回戦〉

慶應義塾大理工	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2
中央大	0	0	0	3	2	0	0	0	X	5

(慶) 佐藤一小泉

(中) 井出、田邊一寺沼

※中大は1回戦シードでの勝ち上がり。大会記録は全日本学生軟式野球連盟公式サイトより抜粋

十回表の中前適時打を生み、決勝進出につながったという。

海老沼主将は「3連覇のプレッシャーは大きく、苦しいこともあった。心の支えとなってくれた片倉、小牧（颯太選手）の2人の副キャプテンをはじめ、チームの皆に感謝したい」と笑顔を見せた。片倉選手は「個性の強いメンバー

をよくまとめてくれた」とキャプテンを思いやり、勝因について「全員野球。皆の力が不可欠だった」と胸を張った。

軟式野球部は春の東都リーグ戦と全日本に続き、秋リーグ戦も優勝。11月下旬開催の東日本学生軟式野球選抜大会で、前年度に続く「4冠」を目指している。



表彰式後、胴上げされる海老沼樹喜主将



海老沼樹喜主将



片倉裕文選手

◆ Profile

海老沼樹喜主将

えびぬま・たつき。群馬・館林高卒、経済学部3年。164センチ、55キロ。内野手。右投げ右打ち。小中高校でも野球チームで主将を務めてきた。走攻守の三拍子そろった選手。「とくに守備は安心して見ていられる」と周囲の評価が高い。

片倉裕文選手

かたくら・ひろふみ。東京・日大二高卒、法学部3年。173センチ、70キロ。外野手。右投げ左打ち。肩と足に自信がある。声を出してチームを引っ張るムードメーカーの役割も果たしている。



弓を引き、心と体を鍛え、 己を律する

第56回全日本学生弓道遠的選手権で優勝

弓道部 田口宜知選手(理工1)

弓道部の田口^{よしとも}宜知選手（理工1）が、2025年8月の第56回全日本学生弓道遠的選手権大会で優勝した。高校1年で始めた弓道で初めて獲得した「日本一」のタイトルに、「調子が良く、いい緊張感で大会に臨むことができた。自信もあった」と胸を張り、中大在学中に「都学十傑（東京都学生弓道連盟のリーグ戦の的中率上位10人）に入りたい」と新たな目標を掲げている。

「^あ中で続けるしかない」 無心で矢を射る

「遠的」は60メートル離れた的を射る競技。一般に広く知られている弓道は28メートル先の的を射る「近的」で、的の直径は近的が主に36センチなのに対し、遠的は1メートルを超す。的までの距離が長いと矢が左右にぶれやすくなり、「近的以上に真っすぐに矢を放つことを意識する必要がある」（田口選手）という。

今回の学生遠的選手権は約380人が参加し、予選を通過した38人が決勝に進出。決勝は5本目まで直径1メートル、

6本目以降が79センチの的で行われた。最後は1本ずつ矢を放ち、的中者だけが次の矢を射ることができる「射詰^{いづめ}」という方法で、田口選手の優勝が決まった。

田口選手は「射詰^あでは中で続けるしかないと思っていた。優勝は素直にうれしい」と笑顔を見せ、「自分が打ち込んできた弓道は間違いではなかったとわかり、自信になった」と振り返った。

タイトル獲得で、より注目される存在になったが、「今後プレッシャーを感じるかもしれないが、結果を出さなければとは考えず、自分の射^しに集中して取り組んでいきたい」と落ち着いた表情で答えてくれた。

弓手の安定感を意識 弓を引く筋肉、練習で培う

田口選手には、試合で緊張しすぎないで弓を引く姿勢のチェックポイントがあり、これを練習のときと同じように実行できている感覚があれば、矢は的中する。周囲の音が耳に入らなくなり、無心になれる瞬間とっていいのだろう。

この感覚を初めてつかんだのは東京農大三高3年の関東大会のとき。直前の練習では調子がいまひとつだったが、「チームのために」と集中力を高めると、田口選手は予選全的中を達成し、チームは団体3位になったという。



全日本学生弓道遠的選手権で優勝した田口宜知選手＝多摩キャンパス弓道場



◆ Profile

田口宜知選手

たぐち・よしとも。埼玉・東京農大三高卒、理工学部1年。歴史と伝統のある中大弓道部で指導を受けたいと入部を決めた。日野市の南平寮で暮らし、授業は後樂園キャンパス、部活動は多摩キャンパス弓道場と忙しい日々を送る。

第56回全日本学生
弓道遠的選手権大会

(2025年8月21日、
全日本弓道連盟中央道場＝
明治神宮至誠館第二弓道場)

〈男子の部・決勝射詰結果〉

優 勝	田口 宜知(中央大1年)	〇〇〇〇〇 〇〇
準優勝	稲葉 侑真(筑波大4年)	〇〇〇〇〇 〇×
3 位	藤鷹 暉士(明治大1年)	〇〇〇〇〇 ×
4 位	松澤 優大(工学院大2年)	〇〇〇×
5 位	松岡 奏汰(筑波大1年)	〇〇〇×

(注) 〇は的中。的の直径は5本目まで1メートル、6本目以降は79センチ。4位、5位は遠近競射(より中心に近いところに矢を放った方の勝ち)で決定。記録は全日本学生弓道連盟サイトより抜粋

自身の弓道の特長は、^{ゆんで}弓手＝左手にあると考えている。矢を放つ瞬間、弓手がぶれずにしっかりと安定している状態。それを常に意識して練習に臨んでいる。射型は、力んで腕の力だけで弓を引いてしまうのを避け、「肩と胸を開き、骨盤を立てる意識で体で引く」のが理想だ。「弓を引く筋肉は、練習で弓を引かないと身につかない」と語る。

弓道に打ち込み、ある程度、矢が的中するようになってくると、的中と不的中の違いを考えるようになり、メンタルも一つの要素だと気付いた。緊張状態のメンタルの自分や、そのときの自分の射型を理解、把握することで、大丈夫だと自らを落ち着かせることにつながるのだそうだ。

「弓道が好きでたまらない」

インターハイ団体3位の実績のある東京農大三高時代も、

中大弓道部の今も、目指す道として、日本一とともに「人間形成」を掲げ、あいさつや礼節、自分を律することに心を配り、活動する。「良い結果が出たときに一緒に喜び合えるから」と語り、実は個人戦以上に団体戦に力をそそいでいるそうだ。2026年は東京都学生弓道連盟のリーグ戦1部昇格、団体のインカレ優勝などとともに、「都学十傑」を目指す。

部の練習が休みの月曜日も多摩キャンパスの弓道場で弓を引くことを欠かさない。週末は練習試合が組まれ、「弓道漬け」の毎日を送っている。趣味を尋ねると、即座に「弓道です」と答えた。最初は高校の部活見学で「格好いい」と感じて始めただけだったのに、取り組むうちに心ひかれ、とりこになった。「弓道が好きで好きでたまらない」。田口選手の目がそう語っていた。



ダートトライアルの男女優勝メンバー。(写真左から)倉品翼、伊藤光翼、野村飛美樹、古川佳愛、武内結の各選手

「ダートの中央」伝統守った!

巧みなハンドル操作、 度胸を求められるダートトライアル

90余年の部史上で初 自動車部が男女の個人・団体を完全制覇

未舗装路で自動車の走破タイムを競う 2025 年度全日本学生ダートトライアル選手権大会 (8月3日、広島県安芸高田市・テクニックステージタカタ) で、自動車部が男女の団体・個人を完全制覇した。ダートトライアルにおける完全制覇は 90 年を超える部の歴史の中で初の快挙。男子団体優勝メンバーの倉品翼選手(法4)は、「仲間に支えられた優勝です。『ダートの中央』と言われる伝統を守ることができた」と喜びを話す。倉品選手を含む団体優勝メンバー 3 人に勝因などを聞いた。

(ダートトライアル選手権大会での写真はすべて自動車部提供)



ダートトライアル選手権の男女の団体・個人を制覇し、部員らの笑顔が弾けた＝2025年8月3日、広島県安芸高田市のテクニクスステージカタ

2 秒差を最後に逆転 優勝とわかり絶叫、感激の涙

男子団体の優勝メンバーは、倉品選手と、野村飛美樹主将（国際経営4）、伊藤光翼選手（法4）の3人。野村主将は個人戦も優勝した。

「団体、個人ともに絶対に勝てると思って挑みました」。野村主将は、6月の全関東学生ダートトライアル選手権で2位だった悔しさをバネに果敢にコースを攻めた。全関東は前日に車両トラブルに見舞われたことが結果に響いた。「車の状態さえ良ければ今回はいける」と手応えを感じていたという。

最初のコーナーへの入りに勢いをつけすぎて、タイムロスしたが、「冷静さを失ったら終わりだ」と思い直し、その後は落ち着いてコースを攻められた。ゴール後、沿道で声援を送っていた仲間の反応から優勝したことに気づき、「絶叫しました。（部員の）皆の様子を見て感激して泣きました」と勝利の瞬間を振り返った。

中大の3選手は自動車部所有のスパイラルシビックに乗り、当日発表されたコースを時速100キロ超のスピードで駆け抜けた。3人が2回ずつ走行し、良かった方のタイムの合計で勝負が決まる。最後の野村主将が、トップの早稲田大につけられていた約2秒の差を逆転し、栄冠をつかんだ。

チーム一丸の勝利 部OBのアドバイスも力に

「コーナーに限界ぎりぎりのスピードで突っ込んでいけるかどうか。その度胸が試される」。伊藤選手はダートトライアルで運転者に求められる能力を、ハンドル操作のテクニックと並び、「度胸」ととらえた。「中大自動車部の皆は（2回の走行のうち）2本目に懸ける気持ち強い。僕も1本目にミスをしたが、2本目は緊張に打ち勝てた」と胸を張る。

伊藤選手と同様に1本目はミスをしたという倉品選手は、それでも「自分らしい走りをすれば勝てる」と信じていた。そ

の理由は「部のメカニックの技術力は日本一と思っている」からだ。倉品選手だけでなく、ハンドルを握った3選手は、車の整備、メカニックを担当した部員たちへの感謝をそろって口にした。

このコースで走行経験のある自動車部OBのアドバイスも大きかった。事前にコースを下見して歩く「慣熟歩行」に同行したり、コースの特徴を教えたりしたという。

野村主将は「チームが一丸となって大会に向けて、それぞれの仕事を責任をもって行った」ことを勝因に挙げた。車に乗る選手は自分と向き合ってテクニックの向上に努め、後輩たちも選手がポテンシャルを最大に発揮できるようサポートを惜しなかった。

けた違いのスピード感 反射神経の勝負

日常の車の運転で味わえないモータースポーツとしての魅力を尋ねると、野村主将は「スピード感の違い」と教えてくれた。ハイスピードの状態の車には、一瞬のハンドル操作がよりダイレクトに伝わり、コンマ数秒の操作や判断の遅れが車の動きに即座に現れるそうだ。車窓の景色も速く流れ、反射神経の勝負でもあるという。

4年生の3選手にとって、中大生として最後のダートトライアル選手権大会で有終の美を飾ったことになる。自動車部の後輩たちへのメッセージを頼むと、倉品選手は「勝てたのも、部員が一丸となって車や選手をサポートしてくれたおかげ。目標をもって突き進んでほしい」と語り、伊藤選手は「楽しむときは楽しむ、（部活動を）やるときはしっかりやる。モータースポーツは危険と隣り合わせなので、メリハリをつけて活動に打ち込んでほしい」と呼びかけた。

野村主将は「負けたり、うまくいかなかったりしたとき、落ち込むのではなく、そんなマイナスをプラスに変えてほしい」と訴え、さらに「勝利をイメージし、そのためにどうしたらいいかを追求してほしい」と結んだ。



男子団体優勝の3選手。(写真左から)伊藤光翼選手、野村飛美樹主将、倉品翼選手＝多摩キャンパス・自動車部ガレージ

◆ Profile

伊藤光翼選手

いとう・つばさ。神奈川・中央大学附属横浜高卒、法学部4年。自らの運転の特長を「繊細さ」とたとえる。大学1年の頃からの夢だった全日本の優勝を果たし、「成長できたことを仲間に感謝したい」と話す。

野村飛美樹選手

のむら・ひびき。東京・南多摩中等教育学校卒、国際経営学部4年。物心ついたときからの車好き。入学式の日、式場の多摩キャンパス第1体育館に向かう途中にある自動車部のガレージで部車「シビック」を“目撃”した。これが縁で入部したという。

倉品翼選手

くらしな・つばさ。中央大学附属杉並高校卒、法学部4年。父親の影響で子供の頃からの車好き。「好きな車で本気で日本一を目指す環境を求めて、強豪の中大自動車部に入った」という。

0秒73差、2位早稲田大を上回る ダートトライアル男子団体

ダートトライアルは、砂利を踏み固めて作られたコースを、スピードや安全性の規定にのっとった自動車で走破する競技。コースはアップダウン（高低差）がある上に、ドリフトや高速走行で攻め抜くコーナリングがふんだんに設けられ、運転の技量が試される。

今回は時速100キロ超のスピードが出るコース設定。レース前、選手がコースの特徴を熟知するため、実際に徒歩で立ち入る「慣熟歩行」と呼ばれる事前の下見を経て、中大自動車部の野村飛美樹主将、伊藤光翼選手、倉品翼選手の3人が、部所有の赤色スパイラルシビック（1800cc）を乗り継いだ。3選手が2回ずつ走行し、団

体は速かった方の合計タイム（5分13秒45）が、2位早稲田大を0秒73上回った。

走行車両の排気量の制限が切り替わる移行期間が2024年から設けられ、2025年度は旧規定と新規定で争われた。中大は旧規定に参戦した。

より正確な運転技術を求められる種目「フィギュア」、舗装路を使ったタイムトライアルの「ジムカーナ」を合わせた3種目の総合点で順位を競うのが「全日本学生自動車連盟年間総合杯」（全日本総合杯）で、自動車部が一番の目標に掲げているタイトルである。